

## ヒガンバナ・・・



お昼がすぎると、ごんは、村の墓地（ぼち）へ行って、六地藏（ろくじぞう）さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いています。

新見南吉「ごんぎつね」の最も印象的なシーンです。兵十の悲しみの深さと、ごんの悔恨の情の深まりをヒガンバナに託して見事に描いています。

その名の通り、秋の彼岸頃になると決まって、管理事務所植え込みの南面のふちに、ヒガンバナが赤色の鮮やかな花を咲かせます。

「シビトバナ」「ユウレイバナ」「ハカバナ」などの俗名を出すまでもなく、古来日本ではマイナスイメージが強く、活け花や茶花等では使ってはいけなかった花でした。ところが、そうしたイメージのない欧米ではマジックリリーやレッドスパイダーリリーと呼ばれて珍重され、多くの園芸品種が開発されているそうです。もっとも現在では、そのイメージも払拭され、あちこちにヒガンバナの名所ができ、特に、高麗の巾着田では100万本といわれる大群落は大勢の観光客でごったがえすようです。

この花、ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草で、草丈30～70cmほどの花茎の上に花径7cmくらいの真っ赤な花が5～7個咲きます。花弁は6枚で細長く、強くそり返り、おしべは6本、めしべは1本で、ともに長く飛び出しています。近くでよく見ると、なかなかユニークで派手な花のつくりと言えるでしょう。

ところで、ヒガンバナに大きなクロアゲハが蜜を吸いにくる姿を見ることがよくあります。でも、不思議なことに、日本に自生するヒガンバナは花が咲いても実がならない不稔性植物なのです。これは三倍体と呼ばれ、生殖細胞の染色体の数が合わないために、正常な受精ができないからです。原産地の中国には二倍体のヒガンバナがあり、こちらは種子が実るのですが、どうしてこんなことになったのでしょうか。興味は尽きません。いずれにしても、日本のヒガンバナは球根でのみ増えることができる植物ということになります。